
空色の魔女

来栖ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空色の魔女

【Nコード】

N7379W

【作者名】

来栖ゆき

【あらすじ】

魔術師は多くあれど魔女という存在は今や稀薄だった。魔女が現れたと聞けば、権力者達はこぞって手に入れようと戦まで始める混沌とした時代――。騎士団長だった父が亡くなり、城から追い出された少女マルティナは、オネット村に住む元気で少し（？）やんちゃな18歳。村が盗賊団に襲われた際、内に眠る魔力が目覚めてしまった！？保護を求めて魔女の集落へ向かう事にしたマルティナは、会えば喧嘩ばかりの幼馴染・騎士ライナスと初恋の君・領主の息子ジャスティン、何かと秘密の多い自称・傭兵のヴィンセ

ントと旅に出る事に……。中世ヨーロッパ世界を舞台にした、ツンデレ魔女と3人の守り人が綴る逆ハーレム、ラブ ロマンスファンタジー。冒険の途中で軽い流血・暴力の描写が入る可能性があるので、念のため15禁にしました <http://hatonezu.nomaki.jp/> こちらでも読めます。

1章 - 1

「もう少ししとやかな娘だったらねえ……」

それ、この前も聞いた。

「せっかく隣の村から求婚にきてくれた方なのに、突き飛ばすなんて……」

だって急に口づけしようとしてきたのよ？

「怒って帰られたわ、こんな乱暴な娘とは結婚できないって」

あんな人と結婚なんてこっちから願い下げね。

「マルティナが美人だって噂を聞いて、わざわざ来てくれたのよ？」
今度からその噂に『乱暴者の』ってつけておくといいわ。

「ちよっと、聞いてるの？ さっきから黙ってないで」

リリーさんがいらいらとした口調で話しかけてきた。大声の独り言が終わったと思ったら間髪入れずにマルティナへの愚痴を言い始める。

よく晴れた空と同じ青色の瞳。腰まで伸びた黒髪はカラスの濡れ羽色を連想するような艶つややかな漆黒。

マルティナは先月18歳になったばかりだった。

2年ほど前からだろうが、リリーさんは頼んでもいないのに勝手に仲介役を引き受けて、結婚適齢期の若者を捕まえてはマルティナを紹介する。うまくいかないところとして愚痴を言いに来るのだ。

彼女是要するに近所のおせっかいなおばさん。『私はこの村のほとんどの結婚を仲介したのよ』が自慢だ。嘘か本当かは確認した事がないからわからない。

ここは領主・オールブライト伯爵が統治する領地内にあるオネツト村。川と森に挟まれた自然豊かな立地であり、領主の城からも王都からも随分離れている、のどかで平和な田舎だ。

森での狩りと放牧、小麦などの収穫を生業なりわいとしている農民が主で、

旅人さえもめったに通らない。村から北に向かった丘の上に建つ立派なお屋敷は、領主が一年のうち狩りの季節に来る一時いつときの為に建てられたもので、それ以外は使われていなかった。

そんな田舎では結婚相手も、自然と子供の頃から知っている顔見知りに限られる訳なのだが、村の若者が全員マルティナと結婚する気がないと解ると、リリーさんは村外から探してきたのだった。

この人はなぜこんなにも躍起になって結婚させようとするのだろうか……。

マルティナにとって、彼女の存在はここ最近の頭痛の種になっていた。そして、リリーさんの独り言はまだ続いている。

「お城にいい人でもいたのかい？ここまで結婚を拒むなんて」

マルティナは沸かしたお湯に茶の葉を入れ、カップと共にテーブルへ運ぶ。

「マルティナ、いいかい？昔は城に住んでたかもしれないけど、今はただの村娘だ。8年も経ってちや貴族サマだって忘れてる。それに身分相応ってものがあるだろう？」

怒りに任せてガシャンと力任せにお盆を置いたら、リリーさんはわざとらしく驚いた顔をして、もう少し女性らしく、と小言を言い始める。

ほんと、もう付き合いきれない。

「まあリリー、来ていたの？」

マルティナのイライラは最高潮に達しつつあったが、リズおばさんが丁度良いタイミングで帰って来てくれた。

「おばさんお帰りなさい。あたし畑に行ってくるわ」

マルティナはこの場から逃れるため、ジョンおじさんを手伝いに行く事にする。笑顔を貼り付けリリーさんにごゆつくり、と伝えると用意した昼食の入ったバスケットを持ちドアへ向かう。

「マルティナ、まだ話は——」

ボタンと後ろ手に閉めたらリリーさんの甲高い声がプツリと途切れた。

「はあ……」

やっと解放された事で自然とため息が出でしまう。

「まさか、隣の村まで行くとは思わなかったわ」

リリーさんは一体いつまでこんなことを繰り返すのだろうか……。少し考えたら背筋に悪寒が走った。

「もう結婚してもいい歳？そんなの、なんでリリーさんが決めるのよ。アンやジェシカが結婚したからって、何で私まで結婚しなきゃいけないの、よっ！」

ブーツで小石をコツンと蹴り上げたら、それはきれいな放物線を描いて飛んでいった。

黒髪によく映える薄水色のワンピースはマルティナが大股で歩けば、裾がめくれ黒いブーツが見え隠れした。この乗馬用のブーツは数年前、ジャスティンが領主の息子という権限を使って内緒で作ってくれたもの。紐で結ぶ編み上げタイプなので脱げにくく、ほっそりしたデザインの陰で動きやすい。少し踵^{かかと}があつて靴底も硬いから、蹴ればきつと相当のダメージだ。

ちなみに、まだ靴底の硬さは誰にも試した事はない。

リリーさんから言わせれば、ブーツなんて女性の履き物ではなくて、もちろん小石を蹴るなんてもつてのほか……。目撃されれば何を言われるかわかったものではない。

納屋に寄つて鍬^{くわ}を取り、肩に担いで畑までの道を早足で歩く。リリーさんの出現で随分遅くなつてしまった。

ジョンおじさんとリスおばさんは、マルティナの血縁者ではない。母親はマルティナを生んだ後すぐ亡くなった。オルブライト家に仕える騎士団長という身分だった父は、マルティナに剣術や馬術などを教えながら、騎士見習いの男の子達と同じように育てた。そしてマルティナが10歳の時、戦に赴いた父は敵との一騎打ちに敗れ死んだ――。

新たな騎士団長に就任したクライヴ卿は女の騎士など品位を落とす、と後ろ盾のないマルティナを城から追い出した。

天涯孤独となった彼女を引き取ってくれたのがジョンおじさんとリズおばさん。父に昔助けられた恩があるというたったそれだけの理由で。

ジョンおじさんもリズおばさんも、マルティナのやる事に反対せずのびのびと育ててくれた。剣術と馬術の経験があるマルティナは、村の男の子よりも活発で喧嘩も強かったし、鋤を持てば畑仕事も手伝い、斧を持てば薪割りもする。

男の子と一緒に遊んで遊ぶ事であれば、女友達をいじめた男の子を追いかけて回して逆に泣かせてしまう事もあった。その度にジョンおじさんに叱られたが、我儘に育たなかったのは2人からの愛情と父の騎士たる教えを忠実に守っていたからだろう。

お陰で、しとやかな乙女というより行動力のある元気な女性になってしまった。

そして、年頃になるにつれて美しく成長したマルティナを放っておく男はいない。彼らは何かにつけて話し掛けたり、手伝おうかと声をかけ始めた。そのたびに必要ないと一蹴する彼女は、思春期を過ぎて友達から女性として見るようになった彼らの気持ちにはまったく気づいていない。

少し前までは一緒に遊んだり喧嘩をした男友達が、気づいたらマルティナを女性扱いし、男だからと自分が優位に立とうとする。

マルティナの事を、まるで弱い者を扱うように接してくる。彼女はそれが腹立たしいと思っていた。

子供のころは喧嘩もかけっこも木登りも、男の子に負けず一番だったのに、いつの頃からか立場が逆転したのだ。

その頃から男の子たちはマルティナを相手にしなくなった。男の子同士で集まり、マルティナが近づくと女は仲間に入れない、と言った。

そして現在、彼らは難儀しているマルティナを見つけては手を貸すと言ってくるのだった――。

「私が女だからって、一人で何もできないと思わないでよね!」

村から少し離れた誰もいない丘の上で思い切り叫ぶ。思い出した腹が立ってきたのだ。

4、5年前、アンの赤い髪をからかっていたジャックが、先月彼女に求婚した。嫌だ嫌だと逃げ回り、その都度マルティナに助けを求めに来たアンがそれを承諾した。

結婚した二人はとても幸せそうだった。

アンに理由を聞いたら、彼女は「そういうものよ」と笑っていたけれど……。

「あんなに嫌がってたのに、意味わかんない」

考えあぐねていると、不意に視界の端に黒いものが移った。何の気なしに森に視線を移す。

村と隣接した森から何者かが現れ、フラフラと2、3歩進むとその場に倒れた。

「大変……！」

マルティナは駆け寄ろうとして立ち止まる。

「傭兵よね？何でこんな田舎に……？」

戦に敗れてここまで逃れてきた雇われ兵か、それとも村を襲いに来た山賊の類たぐいだろうか。一人ならばいいが集団だと、彼らは村を襲い金品と女子供を強奪して、畑に火をかけることもあると聞いた。

村の人に知らせるべきだろうか。しかし、もし襲ってきたとしても、相手が一人なら自分で何とかできる。

「この機会に女だからって見下している人たちをぎゃふんといわせてやるわ！」

マルティナは勇み足で丘を下って森へ向かった。

うつ伏せに倒れた男に忍び足で近づく。汚れた亚麻色の髪に色褪せたマント、腰には剣。風貌から山賊ではなさそうだ。どこかの城に雇われた傭兵が逃げてきたのかもしれない。

「死んでいるのかしら？」

さっきからぴくりとも動かない。鍬の柄でこつんと頭をつついたらかすかなうめき声が聞こえた。まだ生きているようだ。

「み、水……………」

マルティナは持っていたバスケットの中から水を取り出す。しかし、どこの誰かも解らない男を助け起こす事に気が引けて、迷った拳男の頭に水をだばだばとかけてみた。

男は急に飛び起きる。

「きゃっ」

瀕死の男が急に動いたことに驚いたマルティナは、持っていた水を手放した。

それに気づくと男は地面に落ちる直前で瓶を掴む。

「あ、危ねえ……。コラ、もつたいないことをするな！」

彼はマルティナを一喝してからぐびぐびと飲み干す。

「もつたいないって……………」

水を恵んだ相手に怒鳴られるなんて腹が立つわ、と内心思っていると、足元に置いたバスケットを目ざとく見つけた男は、マルティナが止める間もなく中のパンを取り頬張った。

「ちよつと！」

それは私とジョンおじさんの昼食なのに……………。

「うまいな……………」

もごも言いながら2つめのパンに手を付け、水で押し流す。すごい速さで口に入れるのを、マルティナはただ啞然と見ているしかできなかった。

その間に男を観察する。顔も服も泥で汚れている。革の鎧は随分使い込まれていて、身体にびったりしていた。確認したくはないが、こびりついた茶色の染みは血だろうか……………。

髪もぼさぼさで髭も生え放題。董色の瞳だけが、彼の内なる強さを物語っていた。

きつと強い傭兵なのだろう。

水の瓶が空になっていたので、仕方なくバスケットに入れた赤ワインを差し出す。男はそれも水のように飲み干しながら、初めてマルティナの存在に気付いたかのように凝視した。でも手にはパンと

ワイン。そして口を動かす事は止めないらしい。

「ふう、死ぬかと思った……」

男は一息入れてからそう言った。

「それ、私たちの昼食だったのに」

ワインは自分から渡したのだが、ちよと文句を言ってみたら、彼は助かった、と豪快に笑う。本当に死にそうだったのか疑問だ。

「俺は、ヴィンセントだ」

彼はそう言って右手を差し出してきた。騎士流の握手を知っている事に驚きつつ、マルティナも右手を出す。

指先が触れた瞬間、バチツと痛みが走った。

「わっ」

今のは何？

それに気を取られていたらぐいと引っ張られた。

「きゃあ！」

その瞬間に気づく。彼は握手を求めたのではなく引っ張り起こして欲しかったのだ。

ヴィンセントもまさかマルティナが倒れてくるとは思わなかったのだろう、咄嗟に抱きかかえるようにして庇いながら後ろへ倒れた。お陰で衝撃のほとんどは彼の背中に吸収されたのだが……。

頭を起こしたら髪の毛が革の鎧のどこかにひっかかっていた。

「痛っ……やだ、もう！」

恥ずかしいのと人に見られたくないのとで、焦ったマルティナは髪の毛を引きちぎって離れようとした。

「ちよっとまって」

それに気付いたヴィンセントは髪を掴むマルティナの手を握って止めさせる。彼はマルティナの髪を丁寧な手つきではずし始めた。

特に痛みもなく、取れたと言われ顔をあげたらヴィンセントと間近で目があった。

董色の瞳を、髪と同じ色のまつ毛が覆っている。引きこまれそうなほど綺麗な色。近くで見たら思ったよりも若いのかもしれないと

マルティナは密かに値踏みする。

革の鎧を着ているので解らないが、たくましい上腕二頭筋から察するに羨ましいほどの胸板なのだろう。マルティナが欲しても手に入らなかった筋肉を彼は持っている。

「よく大人しくしてたな、もういいぞ？」

しばらく見ていたら、よしよしと頭を撫でられた。

「それとも……何か続きを望んでいるのか？」

いたづらっぽく笑うヴィンセントの顔を見て、自分がどこにいるのかを意識したマルティナは、はっと気付いて離れた。

「あ、あなたが引つ張ったんでしよう！」

威厳を取り戻したマルティナは、急いで鍬を拾って立ち上がる。

「あなた、何者！？言っとくけど、この村を襲つてもたいしたもの
は手に入らないわよ？」

ヴィンセントは、鍬を構えるマルティナを一瞬驚いた顔をして見上げたが、面白いものでも見るように目を細めた。

「襲いはしないさ、俺はただの雇われ傭兵だ」

「雇われ傭兵が、何でこんなところにいるのよ？」

「……実は、逃げてきたんだ」

目を逸らしたヴィンセントは言いにくそうにしていたが、胡散臭そうに睨むマルティナをちらりと見上げると、観念したのかこれまでの経緯を説明し始める。

「西のある領主の元で戦に加わっていたんだが、勝利を確信した領主は俺の提示した金額を支払うのが惜しくなったらしい。戦の混乱に乗じて背後から襲つて来たんだ」

「それはひどい話ね」

背後から襲うなんて騎士道精神に反する行いだ。そしてヴィンセントは追手を撒きながら命からがらここまで逃げてきたらしい。

「怪我、してるの？」

ところどころにこびりついた血の汚れを見ながら尋ねた。

「俺の血じゃない……」

それを聞いたマルティナの顔に一瞬恐怖の色が浮かぶ。

それに気付いたのかどうかわからないが、ヴィンセントは今度は自分で立ち上がった。思ったより背が高い。

マルティナは彼を見上げる。男の人ってずるい。どうして誰もが女性よりも背が高くなるんだろうと思った。マルティナも背が高い方だが、彼は村の若者よりも逞しく背が高い。

一体、どんな鍛え方をしているのだろうか。傭兵と話す機会など後にも先にもない……。よし、後で聞いてみよう！

「で、いくらで雇われてたの？」

「は？ああ……まあ、その……」

ヴィンセントは言いにくそうに頭をかく。

「何よ、言えないの？」

「金貨50枚だ」

「……じゃあけっこう強いよね？」

聞いておいてなんだが、マルティナは金貨の価値を知らなかった。城に居た頃はお金という存在をあまり意識していなかったので、いまい価値が解らない。今マルティナがやりとりしている硬貨は銅の物が主だった。

きつと自分の腕に自信があるが故の提示金額なのだろう。

「ところで、この村で傭兵は雇わないか？」

「傭兵が必要な村に見える？」

ここは小麦畑と森しかない村だ。医者にかかるには城へ行かなければならないとても辺鄙へんぴで平和な村。

北の町や村には稀に盗賊が出ると聞くが、マルティナの知る限り、この村にそんなものは今まで現れた事がなかった。

「残念だけど、こんな田舎で傭兵の仕事はないわ。それに金貨1枚も出せないと思う。金貨なんて一度も見た事ないもの。領主の城に行けばあるかも」

馬で1日の距離を指さす。

「そうか……」

ヴィンセントはマルティナの指さす方向を眺める。つられてマルティナも眺めた。

ここから見えるはずもない城に想いを馳せる。10歳まで育った家。騎士見習いの男の子達と一緒に剣術や馬術の訓練をした。

あの頃はまだ子供だったから、男でも女でも体格の差はあまりなかった。天性の才能なのか、マルティナは何でもうまくこなしていた。同年代の男の子たちの中ではいつも一番で、自分は大きくなったら父のように強くなるんだと夢見ていた。

あの頃は楽しかった。何の疑いもなく、自分が強くいられたから。自分が女だからと負い目を感じる事もなかったから……。

「そういえば名前を聞いていなかった」

急に尋ねられて現実に引き戻される。

「私はマルティナよ」

「マルティナ……かわいい名前だ」

ヴィンセントはにつこりと微笑む。

どこの男も初対面では同じ事を言うものだとマルティナは思った。

「で、何で鍬を構えているんだ？いざとなったら身を守る為？」

「そうよ、あたりまえでしょう？あなた不審者だもの！」

そう言つとヴィンセントは急に噴き出して笑い始めた。随分長く笑い続けるので、鍬を持つ自分が恥ずかしくなってくる。

「な、なによ！何がおかしいのよ！」

「お、お前……面白い、女だな……」

やっと話せるようになったヴィンセントはとぎれとぎれに言う。

「お、面白いですって……」

初対面で、美しいとか可憐だと言われる事は多々あるが、面白いと言われたのは初めてだ。

「ずいぶん無礼な人なのね！こっちだって、初対面で大笑いされるのは初めてだわ！」

「初対面で抱きついてきたのもあんたが初めてだよ」

もはやヴィンセントは涙目だ。

顔がかあつと赤くなるのが感じる。誤解されるようなことを言わないでもらいたい。

「あ、あれは違うわ！あなたが握手を求めてきたのかと思ったの！」

「握手なんて、騎士同士の挨拶じゃないか、城で働いていた経験でもあつたのか？」

そう聞かれるとは思わなかった。

「父が……騎士だつたのよ」

「騎士の父親がいて、なんだってその娘がこんな田舎にいるんだ？」
「もう、なんだっていいでしょ！」

なんで今さらこんな話をしてしまったのだろうか。誤解を解くために必死すぎて余計な事まで言ってしまった。

村の人もマルティナが城から来た事は知っているが、父親が騎士だつた事はおじさんとおばさん以外は知らない。話せばマルティナが貴族出身だという事がばれてしまうから。

「とにかく、この村にあなたが満足する仕事はないわ。じゃ、さようなら」

会話を無理矢理終了させて、空の瓶をバスケットに戻した。一度家に戻ってまた昼食を用意しなければならぬ。

マルティナは踵を返して家までの道を早歩きで向かった。これ以上ヴィンセントと話していると、余計なことまで言ってしまうか知らない。

「待つて、マルティナ。」

ヴィンセントはあつという間に追いついてマルティナと並んで歩く。少し小走りなマルティナに対し、彼は大股で歩幅を合わせる。

ここでも男女の体格の差を見せつけられた気がしてうんざりした。

「何なのよ！」

マルティナは振り向かずにかう。

「仕事を探しているんだ」

「だから無いって言ってるでしょ！」

「傭兵の仕事じゃなくてもいい。畑仕事でも、助けてくれたお礼もしたいし。何でもするから――」

「ほんとに？」

助けたお礼、と聞いてマルティナは立ち止まる。

ジョンおじさんの小麦畑は、この季節の割に種植えが遅れていた。それというのも手伝うと志願した村の若者の好意をマルティナがすべて拒否してしまったから。

先月腰を痛めたおじさんが万全ではないため、かなりの遅れが生じているのだ。

人に頼むのは気が引けるし負けを認めなければならないが、ヴィンセントならば食事のお礼として働いてもらえばいい。村の人間ではないので一生負い目を感じる事もないだろう。

「いいかも！」

誰にも借りを作らず、しかも畑を手伝ってくれる人員を手に入れたことに、マルティナは自分自身を褒めたい気分になった。

自然と顔がほころぶのは止められない。

「うちの小麦畑、手伝ってくれる？もちろん助けたお礼として」

ヴィンセントにもう一度確認をした。じつと見上げていたけど、

彼は何も言わずに黙ってしまったのでマルティナはあら？と首を傾げる。

そういう意味で言ったのではなかったのか……。

「あんた、誘惑してるの？それともそれ無意識？」

「何がよ？」

「無意識か……。あんたにそれやられた男はかわいそうだな」

「どいう意味よ！なんなのよ？」

ヴィンセントは一人納得するとくつくつと笑いだす。

「なんなのよ、ねえ！」

たまに、同年代の男性と会話をしていると不意に相手が黙る時があった。顔を赤くして目を逸らされる事もしばしば……。

自分が何か変な事を言ってしまったのだろうと思っていたが、いくら問いただしてもその理由を教えてもらえない事はなかった。

「ねえ、何？自分だけ知ってるなんてずるいわ、教えてよ！」

「あんた、強いよな！」

強いと言われて嫌な気はしなかったが、これでは意味が通じない。自分は一体何をして強かったのだろうか。

「で、どこでもいいから寝泊りできる場所も提供してくれると助かるんだが」

ヴィンセントは話を戻した。教えてくれる気はないらしい。

「図々しいわね、まあ、いいけど。寝泊りする場所を提供する代わりに、しっかり働いてもらうわよ？もちろんお金は払わないけど、その代わり食事は出すわ」

「ああ、かまわない。助けてくれたのがマルティナでよかった」

そう言われるのは、正直嫌いじゃない。困っている人を助ける、それが騎士だった父の教えの一つだから。

なんだかうれしくなった。

でもこれは一人で決めていい問題じゃない。おじさんとおばさんに相談しないと――。

「あら、いいじゃない。手伝ってくれれるなら大歓迎だわ、ねえあなた？」

「ああ、傭兵なら畑仕事も問題ないだろう」

おじさんとおばさんにヴィンセントの話をしたら二言返事で許可を得る事ができた。

少しくらいは疑って欲しいのだが、マルティナが連れてきた人ならば問題無いと言うのが二人の結論だった。

「おじさん、おばさん！もし極悪非道な大悪党だったらどうするのよ！」

「本人を前によくそんな事が言えるな……」

隣でヴィンセントが呆れていたけど、こつもすんなり許可が取れると少し抵抗もある。

「本当に大丈夫かしら……」

マルティナは小首を傾げて自分の選択が正しかったのかを考えた。見れば見るほど胡散臭い……。

夕食後、マルティナは蠟燭のランタンを手に、ヴィンセントと外へ出る。

満ち始めた月明かりの夜道を二人で歩いた。納屋まではほんの少しの距離、ランタンはいらなかったかもしれないとマルティナは思った。

食事中も彼は人当たりの良い笑顔で、おじさんとおばさんと楽しそうに会話をしていた。どうやら西の村では羊毛生産が盛んだった。

羊なんて興味ないけど、食事中も抜かりなくヴィンセントを見ていたが、怪しい動きは見られなかった。

疑いすぎるのはよくない事だわ、とマルティナは頭を左右に振る。

そんなマルティナの不可解な行動に、ヴィンセントは少し驚いていたが彼女は気付いていなかった。

「どこで働いていたの？その、傭兵として……」

「まあ、色々だ」

急に話かけられたヴィンセントは言葉を濁して答える。

どうして彼は傭兵仕事の話になると黙るのだろうか。アヤシイ……。

マルティナは眉間に皺を寄せてじつと観察する。きっと彼は何かを隠している。暴いてみたい気持ちもあるが、マルティナ自身もあり言いたくない秘密を持っているため強要できない。

「本当に色々だよ、西の方は領主同士での諍い^{いさか}が多いんだ」

ヴィンセントはそんなマルティナに気付いて取り繕う。

「雇われ傭兵は金さえ貰えればどこへでも行く。ここは平和すぎて実感が沸かないかもしれないけど」

確かにこの平和な村以外では、マルティナは城での生活しか知らない。もちろん傭兵の仕事についてもまったくわからない。

「わかったわ、ヴィンセントを信用する」

苦笑いで微笑むヴィンセントは嘘をついているようには見えなかった。

「マルティナ、もう一回言って？」

「だから、信用するってば！」

「そっちじゃなくて」

にこにこしながらヴィンセントはわけのわからない事を言い出した。意味が解らず首を傾げてマルティナは目で問う。

「もう一度俺の名前を呼んで。さっき初めて呼ばれた」

「は……？」

そうだったかしら？

呼ばれるのを待つヴィンセントを前にして、マルティナはもう一度名前を呼ぶ事に抵抗を感じた。意識すれば、それがなにか特別な事を意味する気がして急に恥ずかしくなる。

「必要もないのに言わないわよ！」

ヴィンセントを置いてさくさくと歩みを進めると、背後からくつくつと忍び笑いが聞こえてきた。

なんて腹の立つ男！

彼はマルティナをからかう事に楽しみを見出しているようだっただ。

「さあ、ここがあなたの寝泊まりする場所よ！」

ヴィンセントには納屋で寝泊りしてもらうことになった。まだ得体の知らない男を、自分の隣にある空き部屋に寝泊りさせる訳にはいかない。

畑仕事の道具が置いてある納屋の隅に多めに藁を敷いて、ヴィンセントの寝床を作っておいた。それを見て彼は問題ない、と答える。

「明日からちゃんと働いてね」

「ありがとう、おやすみマルティナ」

ランプを手渡し、扉を閉めようとしたところで思い出す。

「それから、昼間言った事だけど、あたしの父が騎士だって事、村の人は知らないの。誰にも言わないで」

念のため忠告をしたら、ヴィンセントは意地の悪い笑みを浮かべた。

「へえ……内緒なんだ？」

「何よ、もしかして言いふらすつもり？」

月が雲に隠れたのだろう、ふいに辺りが暗くなる。

「これをネタに、マルティナに言う事を聞かせる事も可能って訳だ

……」

マルティナは身の危険を感じて、無意識に一步後ずさったら腕を掴まれた。

「どうしてやるうか」

ヴィンセントの囁き声が耳元で聞こえる。いつの間にか彼は、マルティナの取った間合いを詰めていた。

「あ、あたしを脅そうっていつの！？」

ランタンの明かりだけではヴィンセントの表情は読み取れない。

「自分の秘密をよく知りもしない人間に簡単にばらしたら、こうなるって事だ」

ヴィンセントがランタンを顔の高さまで持ちあげると、からかいの表情で笑う彼の姿が見えた。

「道が暗いから、ランタンはマルティナが持つて行け。転んで怪我でもされたら俺の責任になりかねん」

掴んだ腕を持ちあげてその手にランタンを握らせると、ヴィンセントはおやすみ、と言ってマルティナの目の前で扉を閉めた。

「な、な、なんなのよー!!」

あとに残されたマルティナは、思いの限り大声で叫んだ。

幸いにも納屋が村の中心から離れているお陰で、誰も家から顔を出すことはなかった――。

風は秋の香りを運び、過ごしやすい日々が続く。ヴィンセントのお陰で畑も順調で、おじさんの腰も快方に向かっている。

すでにヴィンセントが村に来て2週間ほど経っていた。

髭も剃り髪も若干短くなって小奇麗になった彼は、23歳だと言われれば歳相応に見える。初めて会った時はもう少し年上かと、マルティナは思っていたのだ。

「そういえば、そろそろ狩りの時期ねえ」

おばさんが昼食を作って持つてきてくれたので、畑仕事をしていたマルティナ達は休憩を取っていた。

「狩りの前に畑がなんとかなって、本当によかったわ」

「なんだマルティナは狩りもするのか？」

男らしいな、と感心するヴィンセントに、マルティナはそんな事しないわよと訂正する。

可能であれば一度くらいはしてみたい気もするけれど。

「領主様は秋になるとオネット村に来て森で狩りをするの。あたしはその間だけお屋敷で働いているのよ」

城から使用人を大勢連れてくる訳にはいかない。マルティナを含

めた年若い娘はお屋敷で掃除や洗濯を手伝い、その分賃金を貰うのだ。

「そうだ、ヴィンセントもちゃんとした仕事先を探しているのなら領主様に頼めばいいわ。傭兵なんだから、お金にならない畑の手伝いをずつと続けるよりもそっちの方がいいでしょ？」

「俺が城に行ったら寂しくなるぞ」

「ならないわよっ！」

ハハッと豪快に笑うヴィンセントにマルティナは落ち葉を投げつける。それはヴィンセントに届かずひらひらと舞っただけだった。それから2、3日して領主と護衛の騎士が村に到着した。

毎年恒例となっている、狩猟と豊穣の女神ダイアナを迎える祭りは、必ず満月の夜に行われた。領主が酒を振る舞い、村人が畑で採れた作物で料理を振る舞う。そして数日後、女神が帰る日に領主が狩りで得た肉を振る舞うのが慣わしだった。

「ねえねえマルティナ！」

アンがマルティナの隣に立ち一緒にジャガイモの皮を剥きはじめた。夜の祭りに備えて村人たちは朝早くから準備をしている最中だった。

「ヴィンセントって、イイ男よね。さっきタマネギの袋運ぶの手伝って貰っちゃった！すごく優しくて素敵なの。傭兵なんですって？」

マルティナは、きゃあきゃあと楽しそうに話す新婚のアンを不思議そうに見つめた。

「アン、ジャックはいいの？」

彼女は、それとこれとは別よ、とニコニコしながら詫びれもなく言う。

「彼はマルティナの好い人なの？」

「ぎゃあ」

手が滑って親指のうす皮が剥けた。出血しなかったのは幸いだ。
「アン！そんなわけないでしょう！」

「なあんだ、マルティナの好い人じゃないなら村の女の子、遠慮しないわよ?」

遠慮?あれで本当に遠慮しているのだろうか……。

ヴィンセントが村に来た頃は皆、傭兵という存在に少なからず不信感をあらわにしていたのだが、いつのまにやら彼の人当たりのよさに警戒心を解いていった。

ふと視線を巡らせばヴィンセントは村の男達と共に準備を手伝っている。

そしてその姿を盗み見ながら囁き合ったり、彼に手伝ってほしいと上目遣いで話しかける女の子達は、みんな笑顔で可愛らしかった。「別に、遠慮なくていいわよ。でもきつと領主様と一緒に城に行っちゃうわ」

傭兵だもの、と呟くと、アンはこちらを見ながらつまらないわ、と頬を膨らませる。

「ずつとここに居られても困るわよ」

マルティナは苦笑いでそう言う、剥いたジャガイモで一杯になった桶をよいしょと持ち上げた。

よろよるとふらつきながら鍋の元へと向かうマルティナに気付いたヴィンセントが、持とうかと尋ねる前に彼女はシャーッと猫のように威嚇するのであった。

「そうね、村の女の子が一人残らず悲しむでしょうね……」

その中にマルティナを数えたアンは、言えば彼女が怒り狂う事を知っていて小声で呟く。

マルティナに置いていかれたヴィンセントは、クスクスと笑うアンに気付くとお手あげたと両手を上げた。

「あの娘こつて、可愛げがなくてとっても可愛いでしょう?泣かせたら私が許さないわよ?」

「マルティナはいい友達を持ったもんだな。肝に銘じておくよ」

そんな会話など聞こえていないマルティナは、二人が見守る中、無事にジャガイモを鍋へと投入させていた。

「すごい祭りだな……」

村の中心広場には大きな焚き火たきびが、狩猟と豊穡の成功を祈る為にと豪快に焚かれていた。その周りでは、村人や貴族の面々が踊ったり歌ったりと各々盛り上がっている。炎の――女神ダイアナの前では農民も貴族も関係なく無礼講なのである。

「こつというのは初めて？」

マルティナは隣に立ったヴィンセントを見上げる。炎の明かりは随分遠くて、月明かりだけでは彼の表情はあまり読み取れなかったけれど、その感嘆の声は本物だ。

「マルティナを探していたんだ。ここは暗いとよく見えないな」

そう言うつとヴィンセントは彼女の手を握る。

「踊りに行こう！」

「わわっ、ちよつと待って」

ぐいと手を引かれて数歩進むが、マルティナはヴィンセントの手からなんとか逃れる。

「踊るなら一人で行ってよ！というか、さっきまで入れ替わり立ち替わり、女の子に誘われてたじゃない」

彼は全ての誘いをやんわりと断っていた。せつかく誘ってくれる相手がいるのなら、何も暗闇の中を探してまで自分を誘わなくてもいいではないか……。

「マルティナがいいんだ」

「行かない！」

ヴィンセントの誘いに即答すると、マルティナはプイと視線をそらす。

「踊っていただけませんか、お嬢さん？」

誘い方が悪いと思ったのか、彼は次に片膝について手を差し出してきた。先程、騎士たちが村の少女達を踊りに誘う際、同じ動作を

していたのを見た。彼女たちは喜んで手を取って踊っていたけれど……。

「だから行かないってば！あたしは踊らないわ！」

やれやれ、と立ち上がるとヴィンセントは腰に手を当てて言う。

「マルティナは踊れないのか」

その言葉にかあつと頬が熱くなるのを感じた。

「ち、違うわよ！人前で踊るのが苦手なだけ！別に、踊れないわけじゃないんだから！そもそも、踊りとか興味ないし！全然、まったく！」

「その割にはよく見てるじゃないか。俺が誘われて断ってたの何で知ってるんだ？」

表情を読み取ろうと、ヴィンセントはマルティナに近づく。目を細めて意地悪そうな笑みを口元に湛えているのが月明かりで見えたという事は、逆に顔が真っ赤になって焦っている自分の顔も、ヴィンセントには見えているという事で……。

「た、たまたまよ、たまたま！ちよつと自意識過剰なんじゃないの！」

「マルティナが健気にも見つめてくれていたら、俺だって自意識過剰にもなるよ」

「見つめてなんか——」

ないわ、と続けようとするが、思い返せば確かにヴィンセントを目で追いかけていたかもしれないと気づく。意識すれば途端に恥ずかしさが込み上げてきた。

「だから、その……」

うまい言い訳が見つからず、マルティナが一步下がればヴィンセントはそれ以上の間合いを詰めながら大股で一步近づく。それを繰り返すうちマルティナの背中に建物の外壁が当たった。右か左に逃げようかと辺りを見回せば、ヴィンセントは逃がすものと自身の両腕と壁でマルティナの退路を断つ。

「ちよつと、なんの真似よ！」

目をそらしたら負ける気がして、マルティナはヴィンセントの顔を見上げた。どうか、赤い顔と心臓の音に気づかれませんかように……。

「踊れない事は恥ずかしい事じゃない、何で嘘を吐くんだ？」

ヴィンセントにやさしく諭される。

「なんですって!？」

嘘を、吐いた……？

誰が？

——あたしが？

「嘘なんか吐いてないわ！自分の秘密を、よく知りもしない人に言うなって……あなたがあたしに忠告したんでしよう！」

マルティナは踊りが得意ではない。

「だから言わなかっただけよ」

嘘を吐く事は騎士道に反する事。だから黙っていただけ。

それなのに……。

「嘘なんて、吐いてない！」

憤りを感じてヴィンセントを睨んでいたら、しばらくの沈黙の後

彼は腕を壁から離れた。

「じゃあ踊ろっ、証明して」

「え……？」

ふいに両手を握られぐいと引かれた。勢い余ってヴィンセントの胸に飛び込むような体勢になってしまう。

無理矢理手を引かれ、2人は聞こえる音楽に合わせて月明かりの下で踊る。

ヴィンセントのリードはとても上手かった。彼の足を踏むことなくスムーズに移動できる。まるで城の騎士を相手に踊っていた時のような完璧なダンス。

マルティナが最後に踊ったのは城に住んでいた時だった。ダンスの心得のある貴族が相手だったので、足を出す位置もターンのタイミングも、誰と踊っても同じだった。

けれど、村での踊りは城のものとは少し違っていて、タイミングが合わずに足を踏んだり、ぶつかったりを繰り返した。そして幼いマルティナは笑い物にされたのだった。

その時から自分の踊りは下手なんだと思っていた。

「完璧じゃないか、きつと問題は男側のエスコートだな」

曲が終わり、息を切らすマルティナにヴィンセントは涼しい顔をして微笑む。体力の差に少し悔しく思いながらも、マルティナは返事をせず、ただ息を整えていた。

ここまで完璧に踊れるとは思っていなかったが、そんな事は大した問題ではない。

マルティナはまだ怒りを静めたわけではなかった。ふーっと長く息を吐くと、同じようにゆっくりと吸う。

顔を上げ、ヴィンセントをきつと睨みつけると、思い切り振り上げた平手打ちをお見舞いした。

「ぐあつ！」

パン——と小気味いい音が、乾いた秋の夜空に響く。けれど祭りの盛り上がりが最高潮に達した広場では誰もその音に気付かない。

「いきなり何を——」

よろけるヴィンセントのその隙を見逃さず、マルティナは右手で拳を作ると、力の限り鳩尾みぞおちにめり込ませた。

金貨50枚の価値があるらしい傭兵は、何も言えずその場に崩れ落ちてひずく蹲る。

「謝罪を要求するわ！あたしを、マルティナ」ローレンスを嘔吐き呼ばわりしたことに対してね！」

マルティナは声高々に宣言した。

名誉を傷つけられたならば、それなりの報復を——これも騎士の鉄の掟である。

「……すまなかった。嘘だと言った事は撤回する。許してくれるのなら、俺は何でもする」

しばらくすると、ヴィンセントは声を絞り出して言った——。

「まったく、驚いた……」

グインセントはマルティナの横にどさりと腰掛けると、まるでうわ言のように呟いた。マルティナに屈した事がそんなに悔しかったのだろうか。

「いい加減にしてよ、女々しいわよ！」

「色々と納得した。これじゃ誰も手出しできないわけだな……」

グインセントはそんなマルティナをちらりと見ながら、素材が良いのには勿体ない、などとわけのわからない事を呟いている。

「しかも、マルティナ」ローレンスねえ……」

つい頭に血が上ったマルティナは、先程フルネームを名乗ってしまっただの。

一生の不覚……。

今までは頭に血が上っても、引つ叩くか引つ掻くか、殴るか蹴るだけで済んでいたというのに。

「村の人には絶対言わないでよね！」

グインセントには一度、冗談だとしても脅されているのだ。

わかってるよ、と言いながら彼はくつくつと笑い続けていた。

焚き火はすでに勢いをなくし、軽く燻^{くすぶ}っているだけだった。

広場の主役は城から共に来た吟遊詩人。

彼がリユートを爪弾^{つまひ}きながら物語を唄い、皆が静かに聞き入っていた。女神と人間の恋物語が終わると、今度は王位を篡奪^{さんだつ}しようとした哀れな王子の物語……。

マルティナの耳にも透き通った歌声が風に乗って届く。昔、城でマルティナも皆と輪になって聴いた事があった。

懐かしい思い出だ。

「言っておくけど、あたし嘘は吐いていないから。黙ってるだけよ……城から来たあたしを貴族の娘じゃなくて使用人の娘なんだって皆が勝手に思いこんでるの」

自分の名誉の為にそれだけはきちんと伝えておく。

「マルティナは城に帰りたいと思ったことはないのか？自分の生まれ育った思い出の場所だろ？」

「そうね…… ヴィンセントはどこで生まれ育ったか知らないけど、あなたは家に帰りたい？」

「俺は——」

ヴィンセントは空を見上げた。真面目な顔で何かに想いを馳せている。懐かしい故郷を想っているのだろうか。

「俺の故郷は…… って、俺はマルティナに聞いたんだよ！」

「惜しかったわ、もう少しでヴィンセントの秘密を知れたのに」

質問に質問で返すのは良くないぞ、と少し焦った顔で言うヴィンセントを見たら嬉しくなって、マルティナはふふつと笑いだす。

「その笑顔は…… 反則だよなあ」

「どういう意味よ？あたしは反則なんかしないわ、騎士道精神に反するもの！」

「論点がずれてるよ」

マルティナが文句を言おうとしたら、大きな音と共に花火が上がった。途端に彼女の関心は花火に移る。

夜空に咲く大輪の花は魔法でしか作れない。城に滞在している火の魔術師だろう。

「すごい、魔法ってすごいわ！」

楽しそうに空を見上げるマルティナの横顔を、ヴィンセントは眺めていた。

「あのね、あたしはこの村が好き。平和で時間の流れがのんびりしていて」

「俺もだ……。居心地が良すぎて、ずっとここに居たくなりそうだ」
そうでしょう、と言いながら笑顔で振り返るマルティナに、ヴィンセントもつられて笑ってしまう。

マルティナが花火に視線を戻すと、ヴィンセントはずっと笑顔を消した。

「ローレンス……か」

小さく囁いたその声は、本人に届く事なく秋風が連れ去っていった――。

よく晴れた朝。マルティナは館内の2階へと続く階段を掃除していた。村から雇われた農民は屋敷の掃除などの雑用が主な仕事だ。領主の屋敷は要塞を思わせるような城壁はないものの、しっかりとした石造りの建物だった。非常の際でも籠城には向かないが、こんな田舎で今までに非常時はない。

城壁がないお陰で窓から外を見れば、遠くの景色が見渡せた。少し高いところから見渡す緑の草原と小さく見える村。この階段の間にある窓はマルティナのお気に入りの場所なのだ。

「トウラララ……」

周囲に誰もいないのをいい事に、つつい鼻歌交じりで一段ずつ丁寧に階段を掃く。

ふと話し声が聞こえて外を覗けば、アンとジェシカがおしゃべりをしながら井戸の水を汲み上げていた。話の内容はよく聞こえないが、どうやら騎士の中で誰が一番かっこいいか、という話題のようだった。その会話の中からライナス、という単語を聞き取り、マルティナはつつい眉間に皺を寄せる。

「どこがいいのよ……」

独り呟き、箒を握る手に力を込めた。

きやつきやつと盛り上がる2人は、そのうち城から同行した使用人頭に見咎められて怒られている。

それを見てくすぐすと笑っていると階上から視線を感じた。怒られる、と咄嗟に感じたマルティナは恐る恐る見上げる。

「ライナス……」

そこにいたのは、3年前に見習いから騎士へと昇格した幼馴染のライナスだった。

彼とは父の元でいつも一緒に鍛錬や稽古をした仲だった。マルティナには勝てない、と誰もが尻ごみしていても、ライナスだけは毎

回勝負を挑み、そして負け続けた。

8年前のあの日——マルティナが城を去ったあの日、ライナスはまた勝負を挑んでいつものように負けた。

「いつか必ず、俺が勝ってやる！だから城を出ても鍛錬を怠るなよ！」

そんなライナスの言葉にマルティナは随分と救われた。城を出ても、村に住む事になっても友情は変わらないのだと思っていた。

彼が騎士へ昇進するまでは……。

ライナスの肩まで伸びたこげ茶色の髪は、騎士になった頃から短く刈り込んでいる。彼が言うには、鎧を着る時に邪魔だからだそう。そんなものの自慢にしか聞こえない。

簡素なシャツとブーツ、腰に剣を差していない姿から、今は休憩中だろうか。茶色の瞳は不安そうで、何か言いたげだ。

何を言いたいかは、マルティナにはだいたい想像がついた。

しばらく見つめ合い沈黙が流れる。その静寂を破ったのはマルティナのため息だった。

「何か用？」

マルティナは素っ気なく問う。

「マルティナ、話があ——」

「あたしはないけど、何よ？」

「その、謝りたくて……」

3年前の、あの思い出したくもない出来事を？

「何を謝る必要があるの？あたしが負けた事？それともライナスが勝ったこと？」

ついイライラしてしまい、マルティナは声を荒げる。

そんなマルティナに睨まれたライナスは目をそらした。

「もしあたしが……泣いたことを言っているのなら、あたしはライナスを絶対に許さないわ！」

「そうじゃない。俺は……」

マルティナは過去に2度だけ泣いたことがある。1度目は父が死

んだ時、2度目は——ライナスに初めて負けた時……。

——3年前。

ライナスが騎士になったと嬉しそうに屋敷から村へと駆けてきた。2人が15歳の頃だった。

「ティナ、もう一度勝負を挑みたい！」

剣を2本持つてきたライナスはそう言ってマルティナに勝負を挑んだ。

「いいわ、あたしの100勝目を、ライナスの騎士昇進祝いにしてあげる」

一度もマルティナに勝ったことがないライナスは狩りに来た折、5年ぶりにマルティナに勝負を挑んだ。現時点でマルティナの99勝0敗である。

この5年間、騎士見習いとして日々精進し、体格も子供の頃と変わったライナスと、畑仕事や薪割りで身体を鍛えてきたわりに、胸や尻にだけ肉が付き始めたマルティナとの勝敗は決まっていたも同然だった。

そして想像通り、ライナスはいとも簡単に勝利を収めた。

「ティナは女なんだから、いつか負けるって決まってたんだ」

ライナスはいつもの調子でマルティナに軽口を叩いたつもりだった。

「勝つたら伝えようと思っていた事がある……マルティナ、俺はお前が好——」

「もう一度勝負よ！」

ライナスの一世一代の告白は、むきになったマルティナの言葉にかき消された。

「勝負はもうついただろ、また負けたいのか？」

そして、格好が付かないと焦ったライナスは、2度も言うてはならない単語を口にした。彼がしまったと気付いた時、マルティナの頬はすでに濡れていた。

騎士として鍛錬に明け暮れたライナスは、そんなマルティナをどう扱っていいのかわからず、その場から走り去ったのだ――。

それから3年の月日が経った。

ライナスの前で泣いてしまった事が悔しくて、親友だと思っていた彼がそんな風に思っていた事に憤りを感じて、マルティナは彼を避け続ける事しかできなかった。

例えライナスとすれ違っても、話しかけられても、マルティナは何も答えなかった。気配を察すれば無意識に逃げていた。

この時までには……。

「マルティナ、俺は3年前ひどい事を言ってしまった。ずっと謝りたかったんだ」

「へえ、あたしは憶えてないけど、なんて言っただの？」

目を細めてじつと睨み、嫌味を言えばライナスはまた黙ってしまった。これくらいの意地悪なら多少は許されるだろう。

マルティナは何も言わないライナスの存在を意識しながら掃除を始めた。しばらくすれば彼は消える。

いつものように……。

けれど今回は違っていた。ライナスは階段を降りるとマルティナの横へ立つ。

「マルティナ……」

あの時から、ライナスはマルティナを『ティナ』と呼ばなくなった。幼少期のあだ名は父が死んだ今、ライナスの他にジャスティンしか呼ぶ者はいなかったのだが。

あだ名で呼ばなくなったライナスは、きっと自分の事を見下しているのだろうとマルティナは感じている。まるで村の男友達と同じだ。

彼らはどんどんマルティナを追い抜いていった。ライナスだけは違うと思っていたのに、そうではなかったらしい。

「すまなかった。城を出てからもずっと鍛錬を怠らなかったマルテ

イナに、俺は勝った事が嬉しくて最低の言葉を投げてしまった。一度しか勝っていないくせに、自分でもおこがましいと思う」

ちらりとライナスを見れば、彼は真面目な顔をしている。

「本当にすまなかった」

ライナスはそう言うのと頭を下げた。

予期せぬ出来事に驚いたマルティナは箒を持ったまま硬直する。ずっと黙っていればライナスもその格好のまま動かない。もしも誰かが通りかかれば、村娘に騎士が頭を下げているという不名誉な姿を目撃されてしまう。

そしてタイミングが悪く、石の廊下をカツンカツンと近づいてくる足音が聞こえた。

これでライナスは頭を上げるだろう。この場をどうしていいのかわからなかったマルティナは、少しほっとしながらライナスが動くのを待った。けれど彼は一向に頭を上げようとしなない。

ライナスは、マルティナの許しを待っているのだ。

「わかったわ、もういいから……。誰かが来てその姿を見られたら、困るのはライナスでしょう？」

「許すと言ってくれ」

それまでは詫び続ける、と言うライナスの姿と、だんだんと近づいてくる足音にマルティナは焦る。

「許すわ、許すから！顔を上げて、ライナス」

その言葉を聞いてようやくとライナスは顔を上げた。心なしかその表情は晴れ晴れとしている。対するマルティナは慌てた様子で階段を上るうとして、スカートの裾を踏んだ。

「きゃっ」

上段から足を踏み外してバランスを崩したマルティナは転げ落ちそうになるが、すんでの所でライナスに抱きかかえられた。

近づいてきた足音はもう聞こえない。角の部屋へ消えたようだった。

「マルティナ、階段ではふざけるな。落ちたらどうするんだ？」

安心してほつと息を吐くのと同時に、耳元でライナスの声が響いて驚く。久しぶりに近くで聞いたライナスの声は低く、マルティナの身体を通して反響して聞こえた。

見上げれば頭一つ分背の高いライナスの顔が近くにある。

3年前と比べれば、彼はまた成長して逞しくなっていた。

「どうしてティナって呼ばないの？昔みたい……」

思い出したら尋ねずにはいらなかった。彼はあの勝負で勝った時から、ティナ、と一度も呼んでいない。

その質問に意表を突かれたライナスは驚いて目を見開いた。

「その……お互い対等な立場で勝負を挑みたくて。もしも傷つけたのならそれに対してもきちんと詫びる」

目を逸らさずにそう言われれば、真実なのだとマルティナは実感した。

「そついうことだったの。てつきり自分が騎士になったからって、あたしの事を見下してると思ったの。あたしが女だからって……違うのね？」

「ち、違う！断じて違う！」

今度は少し目が泳いだ気がしたけれど、力強い瞳に見つめられればライナスは嘘を言っていないのだろぅと思った。

「じゃあ、これからも仲良くしてくれる？ライナスにはティナって呼んでほしいの」

子供っぽいお願いをする事が少し恥ずかしくて、マルティナは伏せ目がちに言うが、ライナスは何も答えてくれない。

「別に、無理にとは言わないわ……」

やっぱり言わなければよかったかもしれない。顔を上げるのが恥ずかしくて上目づかいでちらりと見れば、ライナスは心なしに顔を赤くして口をぽかんと開けていた。

その姿が何を意味しているのか解らず、マルティナは小首をかしげて見上げた。

「ライナス……？」

熱でもあるの？と続けようとして、ライナスはまだマルティナを抱いていた事に気付いたらしく、ものすごい勢いで離れた。

「あ、ああ、わかった、ティナ。じゃあまた……」

ライナスは焦った様子で階段を下りはじめ。そして何段目かで踏み外して階下まで落ちた。

「やだ、ライナス大丈夫？」

手を貸そうと階段を下り始めたマルティナを、ライナスは片手を出して静止させると振り返りもせず去っていった――。

「本当に大丈夫かしら？」

こうしてマルティナとライナスは、3年ぶりに友情を復活させた。

「ん〜」

マルティナは両腕を天高く上げ背伸びした。

村から雇われた使用人は仕事が終われば家に帰る。夕日の眩しさに目を細めながら帰路につこうとした時だった。

「マルティナ！」

名前を呼ばれ、キョロキョロと声の主を探していると、夕日を背にした木の下からヴィンセントが立ち上がった。

欠伸をしながらマルティナに近づくと、気持ち良すぎて寝てしまった、などと呟く。

「こんな所まで来て何してるの？」

屋敷の敷地内で寝こけるとは、不審者として捕まったらどうするのだろうかとマルティナは少々呆れてしまう。

「マルティナを迎えに来たんだ」

「一人で帰れるんだけど？」

マルティナは途端に不機嫌になった。ここから村までは丘を下る一本道だ。迎えも何も危険はない。

「あ、いや……。本当はマルティナのつてで貴族の誰かを紹介してもらおうと思った」

苦笑いのヴィンセントは取り繕うように言う。本当はマルティナを迎えにきたのだが、ヴィンセントはあたかもそれが目的だと言うように、ついでの要件を口にした。

「だったらそう言いなさいよ。でも誰かって言われても……」

幼馴染のライナスやジャスティンに言えば騎士団長か領主様に紹介して貰えるかもしれないが……。

先程仲直りをしたライナスはおるか、領主の息子であり次期領主のジャスティンにだって簡単に頼める話ではない。城にいた頃ならいざ知らず、マルティナは今やただの村娘だ。身分相応というもの

がある。

ヴィンセントに城で働く事を勧めたはいいが、方法までは考えていなかった。

マルティナは腕を組んでしばし考える。

「ティナ！」

馬の嘶き声が聞こえ、振り返る前に声をかけられた。

「ジャスティン……」

そこには純白の愛馬を連れたジャスティンが佇んでいた。遠乗りから戻ったのだろうか、金色の長い髪は少し乱れて跳ねているが、夕日を浴びた金髪はとても綺麗で美しい。気品の感じられる乗馬用の白いシャツ、飾りの付いたベルトやブーツは領主の息子らしく上等なものだ。

翠色の双眸は笑みを湛えてマルティナだけを見つめている。まるで、そこにヴィンセントがいないかのように……。

「1年振りだね、元気だった？」

「ええ、ジャスティンも元気そうね」

につこり笑うジャスティンにつられてマルティナも笑顔で答える。屋敷の中ではジャスティンとすれ違っても、目を合わせて笑いかけてくれる事はあるが、話しかけられる事はない。それはマルティナもジャスティンもお互いの身分を承知しているからだ。

次期領主が村娘に気軽に話しかける事などあつてはならないし、逆は絶対に有り得ない。

けれど、昔は城で一緒に育ったもう一人の幼馴染だ。人目もなく2人きりになれば会話もするし、ジャスティンは昔と変わらない笑顔は今もマルティナに向けてくれる。

彼女がまだ城にいて、父が騎士団長だった頃、ジャスティンも父から指導を受けていた。2つ年上の彼は小さなマルティナにやさしく接し、彼女が剣を持つようになれば厳しく指導をしてくれた。

マルティナや他の見習い騎士達に対しても身分関係なく接するジャスティンに、マルティナは自然と恋に落ちた。

いつかジャスティンの横に並んで立つ事を夢見た。彼の背中を守る為に剣を振いたかった。

しかし、それは叶わぬ願いとなり、マルティナの初恋は花びらのように儚く散った――。

「ところで、そこに突っ立っているのはティナの知り合い？」

ジャスティンは、マルティナの後ろに立つヴィンセントに初めて気付いたかのように尋ねた。

「あ、そうそう忘れてたわ。彼はヴィンセント、傭兵なの」

マルティナはヴィンセントにも同じようにジャスティンを紹介する。

ヴィンセントは小さな声で、忘れてたのかよ、と愚痴っていたが、マルティナは聞こえないふりをした。

「あのね、ヴィンセントは仕事を探しているの。よかったらお城で雇ってくれないかしら？――ほら、あなたからもお願いしなさいよ！」

まだブツブツと文句を言い続けるヴィンセントにマルティナは振り返る。

「ああ、雇ってくれると助かるんだが……」

「それが人にモノを頼む態度なのっ!？」

マルティナが背中を見せている間、ジャスティンはヴィンセントに対して鋭い視線を向けていた。

それに気付いたヴィンセントは気にいらないという表情をするが、即座にマルティナに怒られてしまうのだった。

「ティナ、申し訳ないけど、僕にはそんな権利はないんだ。それに雇うとしてもこの誰かもわからない傭兵を簡単には雇えないよ」

もしも敵の間者だとすれば、内側から陥落させられる事もある。

ジャスティンはそれを危惧していた。

この国には王がいても領主同士の諍いには介入してこないのが現状だった。領主同士が領地を奪い合ったとしても、勝った者が国に

賠償金を支払えば許された。決められた税金を王国に支払い、王領にさえ手出ししなければいいのだ。

「そ、そうよね。無理なお願いをしてごめんなさい……」

そう説明されれば正当な理由だと気付かされる。

「でも、ティナの知り合いなら、僕から父に紹介してみるよ」

しゅんとしてしまったマルティナにジャスティンは元気づけるように言った。

「そんな、ダメよジャスティン！」

大丈夫だよ、と微笑むジャスティンにヴィンセントの機嫌は悪くなる一方だ。

「大丈夫なら最初からそう言えっつーの！」

「ちよつとヴィンセント、なんて事言うのよ！」

マルティナが怒ればジャスティンは、相変わらず元気だね、と彼女の頭を撫でる。

「ジャスティン、あたしも子供じゃないんだから、そういうのは止めてって言ったじゃない！」

「ごめんね、ティナがかわいくて」

そう言えばマルティナは頬を膨らませて怒るのを知っていて、ジャスティンはわざとからかった。いつもの調子を取り戻したマルティナに、彼は目を細めてやさしそうな笑顔を向ける。

「またもやヴィンセントは蚊帳の外だった……」。

「ああそうか、マルティナだからティナね……。俺もそう呼ぼうかな？」

自分がここにいる事を主張するかのように、ヴィンセントは関係のない事を口走ってみるが、

「絶対ダメ！」

ジャスティンが何かを言う前にマルティナが大声を出す。

「何でだよ？」

「とにかく、ダメなの！」

マルティナとヴィンセントを交互に見たジャスティンは、ヴィン

セントにだけ意地の悪い笑みを浮かべて見せた。それは先程からマルティナには一切見せていない表情だ。

それに気付いたヴィンセントは、なおも不機嫌な顔になるが、マルティナはそれを見咎めて彼に小言を言うのだった。

「ティナ、今日はもう遅いからまた明日彼を連れておいで。帰り道に気を付けるんだよ」

「ご心配なく、あたしは大丈夫よ！ジャスティンこそお供を連れずに遠乗りなんか行ったら危険なんだからね！」

マルティナは可愛げのない返事を返したけれど、ジャスティンはまるで愛の言葉を囁かれたかのようにマルティナを見つめ返すだけだった……。

じゃあね、と手を振るマルティナと、睨みつけるヴィンセントが丘を下り始める。

「ライナス、聞いていた？」

振り返らずに呟くジャスティンの背後から、そっとライナスが現れた。

「あいつは何者だ？」

「西の方で傭兵として働いていたそうだ。彼は今、ティナの家に世話になってるんだって」

はい、と手綱を渡しながらライナスをちらりと見れば、想像通りの彼のくやしそうな顔が面白くてジャスティンは満足する。

「今までティナは自分に言い寄る男をちゃんと排除してたから安心してただけだなあ……。今回はティナだけじゃ手ごわそうだね」

「ティナが選んだのなら……。いいんじゃないのか？」

ライナスは暗い声で呟いた。

「弱気になっちゃダメだよライナス！どんな事をしてでも城で引き取らないと……。村に置いておいたら危険だ、ねえクリスティーヌ？」
ジャスティンはぼんぼんと愛馬の首を叩く。

遠くのマルティナが振り返り、ライナス！と叫んだ。表情は見えないが、両手を伸ばして大きく手を振っているのが確認できる。

マルティナに手を振り返すライナスを横目に、ジャスティンは思いついたかのようにクスクスと笑いだした。

「へえ、仲直りできたんだ？」

「盗み聞きしていたくせに、何を言っているんだ」

「心外だなあ、偶然通りかかったただだよ。いい雰囲気だったし、そのまま告白しちゃえば良かったのに……」

「そ、そんなこと——」

思い出したかのように顔を赤くしたライナスは、厩へ行くと言ってジャスティンの馬を連れてその場を後にした。

「ヴィンセント……僕が一番嫌いなタイプだ」

小さくなったマルティナの背中を眺めながら、笑顔を消したジャスティンは冷たい声で囁いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7379w/>

空色の魔女

2011年9月26日04時19分発行